

Title	他者との遭遇：『大理石の牧神』論
Author(s)	福岡, 和子
Citation	英文学評論 (2005), 77: 49-67
Issue Date	2005-02
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_77_49
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

他者との遭遇——『大理石の牧神』論——

福岡和子

1

『大理石の牧神』¹ (1860) は、ホーソーンが書いた中で唯一外国に舞台を置いたものであり、「見知らぬ土地に行ったアメリカ人についての小説」²である。そこで本論文では、主としてこの作品を旅行記として考察し、外国での他者との出会いに焦点を当てて論じたいと思う。その際、同時代のもう一つの旅行記、メルヴィルの『レッドバーン』³と比較検討することで、そのホーソーン的特色を明らかにしたいと思う。

-
- 1 Nathaniel Hawthorne, *The Marble Faun: or, the Romance of Monte Beni* (New York: Penguin Books USA Inc., 1990). The text is that of the *Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, a publication of the Ohio State University Center for Textual Studies and the Ohio State University Press. 以下、作品の引用はすべてこの版による。
 - 2 Evan Carton, *The Marble Faun: Hawthorne's Transformations* (New York: Twayne Publishers, 1992) 14.
 - 3 Herman Melville, *Redburn: His first Voyage* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1957). 以下、作品の引用はすべてこの版による。

しかし、直ちに本論に入っていく前に、そもそも旅行記とは何か、旅行記の特色とは何かを、次のバフチンの記述に従って確認しておきたい。

何よりも旅行記の世界の中心には作者自身の実際の故郷がある。その故郷が、視点、比較の尺度、アプローチ、価値評価を構成する中心として機能し、外国やその文化をどのように見、理解すべきかを決定するのである。…旅行記においては、祖国の意識それ自体のために——すなわち、物事を見、描写する際、構成の中心となる内的意識が祖国に置かれているために——その国の全体像が根本的に変化させられてしまうのである。⁴（傍点は原文イタリック）

ここでバフチンが指摘しているのは、旅行記の作者が訪れた異国の文化を語ろうとする時、意識の根底にあるのは祖国であるという、旅行記の基本姿勢のことである。言い換えるなら、たとえ外国にあっても、旅行者は自分が持っている準拠枠からは自由になれない。つまり目に入ったものを全て記録するのではなく、自分がその準拠枠に基づいて見るに値すると考えたものを見、それをレポートするのが旅行記だということである。したがって、バフチンも警告しているように、われわれが旅行記を読む時に注意しなければならないのは、旅行者がそのように軸足を自分の故郷において他者にアプローチし、他者を価値評価しようとする結果、その実相を極端にゆがめてしまい、真実の姿を捉えることが困難になる可能性があるということである。このような旅行記の基本的定義を踏まえたとえ他者との出会いを考察する時、果たしてその出会いはそもそも可能なのか、可能とすればどのような形をとるのか、作品に即して具体

4 Michael Holquist, ed., *The Dialogic Imagination: Four Essays by M.M. Bakhtin*, trans. Caryl Emerson and Michael Holquist (Austin: University of Texas Press, 1981) 103.

的に考えてみたい。

2

既に述べたように、まずはメルヴィルの『レッドバーン・初航海の記』(1849)を取り上げ、そこにたまたま生じた1つの出会いに触れておきたい。というのも、ホーソーンの『大理石の牧神』を旅行記として考察する上で、メルヴィルのこの旅行記が重要な一つの手がかりを与えてくれると思われるからである。

『レッドバーン』は、父を亡くし自分で生計を立てなければならなくなったアメリカの若者が、見習い水夫として始めてリヴァプール行きの商船に乗ったときの体験談である。しかし、そのように一見イギリス行きの旅行体験談の体裁をとりながら、興味深いことに、この作品には旅行記というジャンルの虚偽性を痛烈に揶揄している箇所がある。始めて訪れたイギリスで目にしたものが、今にも崩れそうな蔦の絡まった僧院、教会の尖塔などではなく、「ニュー・ヨークの倉庫街に恐ろしく似た薄汚い倉庫」であったとする主人公は、「見たことがない (strange) ものなどここには何もない」(121) と嘯く始末なのである。“strange”とか“stranger”という言葉が、旅行記のキーワードであることは言うまでもないが、私がここで取り上げたいのは、メルヴィルがそうした旅行記批判を、主人公と他者との出会いを通じて行っている一つのエピソード (37章) である。

リヴァプールのある通りに差し掛かったレッドバーンは、弱弱しい泣き声を耳にする。それはどうやら倉庫の地下で飢え死にしかけている母子の声とわかる。しかしレッドバーンは地下に通ずる入り口のところに立ったまま、なかなか下には降りようとはしない。彼が躊躇して止まっている入り口は、大げさな言い方をすれば、餓死しかかった母子と彼との間に置かれた境界であり、彼が単なる旅行者という設定であれば、恐らく知らぬ顔を決め込んでそのまま通り

すぎてしまうことも可能だったかもしれないのである。結局は誰の助けも得られず、苦勞しながら狭い通路を、悪臭放つ地下室まで降りていったレッドバーンだったが、勿論その母子を救う事などできずに終わる。しかし、ここで問題となるのは、その彼が母子のため何ができたかではなく、「境界」を跨いだということであり、その結果、生じたことである。

レッドバーンが「境界」を跨いで見出したもの、それは外国の美しい歴史的景観などではなくて、既に死臭を放っていると言ええる哀れな母子の姿であった。それは人々が普段の生活において全く忘れ去っている醜悪なもの、見たくもないものとして影に追いやっているおぞましい部分であるとさえ言ってもよい。レッドバーンは思いもかけずそのような存在に目を見開かれた結果、激しい動揺に襲われたのである。母子に対してなんら救いの手を差し出すこともできない焦燥感、絶望感、挙句の果てに、いたずらに死を引き伸ばすよりも、いっそのこと早く命を絶ってやりたいという恐ろしい衝動にすら襲われた事を告白する。その衝撃はキリスト教国でありながら余りに冷酷な社会に対する憤り、更にはこんな形で母子を見殺しにしても平気である人間性への疑問、果ては信仰への疑問にすら向かうのである。

しかし再び僕は地下室を覗き込んだ、そしてそこに青ざめ萎びた死体がまだ蹲っているような気がした。あー！われわれの信仰とは一体なんだというのだ、どうして自分は救われるという希望がもてるのだ？貧しく孤独なままに死んだ母子のために心の慰めが得られるように、聖書よ、僕にもう一度あのラザラスの物語を語っておくれ。われわれは仲間の貧困や災いに囲まれているけれど、それでもその苦痛を知らぬ顔をして、自分自身の快樂にふけている。それは死体とともに寝起きし、死者の館で浮かれ騒いでいる人のようではないのか。(178)

当時の書評の中には、こんなことが実際起こるはずがない、フィクションで

はないかと疑問を投げたものがあつたが⁵、それはむしろ、この出来事が旅行記というジャンルにいかにか適さないものであつたかを如実に物語っていると思われる。思いもかけない他者との遭遇とその衝撃を描いた時、この作品は旅行記のジャンルを逸脱してしまつたと言ふことができるのではないだろうか。言い換えれば、レッドバーン自身が、パフチンの言う旅行記の語り手から逸脱してしまつたのである。彼は他者との出会いを通して、自分自身がそれまで信頼し依拠していたもの、なんら疑つたことさえなかつたものが脆くも崩壊するに近い経験をもつたのである。

3

さて『大理石の牧神』は、上に取り上げた『レッドバーン』と比較した場合、また違った特色を持った旅行記として浮かび上がってくる。すなわち、同じく旅行記から逸れる傾向を持ちながらも、『レッドバーン』とは違って、その批判的傾向をむしろ封じ込めてしまい、旅行記として終わつた作品ではないかと思われるのである。

この作品は、ホーソン自身が家族とともに実際に経験したイタリア旅行について詳しく記録したノートブックから、多くの記述をかなりそのまま移し変えたものである。またブロードヘッドによると⁶、当時ローマに行こうとするアメリカ人は当然読んでおくべき本であり、ローマの名所をどのように観光すべきかを教える「文化装置」の一部となつていたという。実際、この作品には、アメリカ人観光客が訪れるべき、歴史的価値のある建造物、美術的価値のある建造物、新しい国アメリカにはない廢墟などなど、今更言う必要もないほどに、

5 Watson G. Branch, ed., *Melville; The Critical Heritage* (London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1974) 199.

6 Richard H. Brodhead, "Introduction," *The Marble Faun* xxvii.

それらの記述に満ち満ちている。しかし、この作品の面白さは、そのような旅行記的、ガイドブック的特質が顕著である一方で、それとは全く異質なプロットを展開していることである。それは言うまでもなく、ドナテロの犯した殺人を指しているのだが、ここではその異質性を別の面から考えてみようと思う。事件の当事者の二人に焦点をあてるのではなく、その事件に間接的に関与することになった外国人の方に焦点を当てるということである。つまり、ケニヨンとヒルダという二人のアメリカ人が、異国の友人が苦しむのを目の当たりにして、単に外から「見ている」だけの旅行者的立場を捨て、両者を隔てる「境界」、ミリアムの言う「深い亀裂」(207)を果たして越えることができたかどうかを検討してみようということである。

まずは、ケニヨンに、それもトスカナを訪れた時のケニヨンに話を限ることにする。それは、余りに変貌したドナテロに驚いて何とか手を差し伸べようとするケニヨンには、あのレッドバーンとのつながりと相違点が見出されるように思うからである。また、このトスカナ訪問を記述する部分は、ローマとは異なるイタリアの牧歌的景色、その地方独特のワイン作り、古代から伝わる神話や伝説など、まさしく異国情緒に満ち溢れた美しい描写が連なり、旅行記として読者を楽しませる箇所でもある。

そこで問題としたいのは、そのトスカナの美しい景色に見入るケニヨンの視線、つまり旅行者としての視線は、ドナテロに向ける彼の視線と違うのか、同質なのかという点である。その問いに答えるために次の引用をみてほしい。

「またしてもこんな景色を私に見せてくださる神様に感謝だ」と、彼なりに信心深い彫刻家は恭しく帽子を脱ぎながら言った。「僕はいろんな地点からこの景色を見たが、いつも最高の感謝の気持ちが沸いてくる。これ位少し上に登って、人間に対する神の御業を少し広く見ただけで、哀れな人間の精神はますます神様の摂理におすがりしたい気持ちになってしま

う。神様はすべてのことを正しくなさる！神の御心がなされますように！」
「あなたは私には見えないものが見えているのですね。」と、ドナテロは暗い調子で言った。しかし彼の友人をこれほどまでに元気づけている比喻をいつになく理解しようと苦勞していた。「あるところには太陽が射し、あるところには雲がかかっているのですね。そしてどちらの場合にも理由なんかないのだ。あなたには太陽で、私には雲なのだ。それからどんな慰めを私が引き出せるというのですか。」(258)

この引用に現れているように、ケニヨンの視線は極めて敬虔である。目の前に繰り広げられるトスカナの美しい景色に、人間を含めてあらゆるものに向けられた神の摂理を読み取り、神への深い信頼と感謝の念を表明しているのである。トスカナの自然はそれ自体において存在しているというよりは、彼にとって自分が信じて疑うことのないものを確認する存在となっていると言ったほうがいい。しかし、それは言い換えれば、彼には自分が信じていること、見たいもの以外には見えてこないということではないだろうか。自分には見えている全能の神の配慮が、ドナテロには見えていない、或いは見ようとしてもしないことへの苛立ちや失望を感じる一方で、反対に自分にも見えないものがあるなどとは全く気付いていないということである。

面白いことに、こうした二人の異邦人のちぐはぐなやり取りは、メルヴィルのあるシーンを思い出させる。それは、「ベニト・セレノ」⁷ (1855) の最後の場面において、アメリカ人のデラノ船長がスペイン人のセレノ船長に対して次のように言うシーンである。

7 Herman Melville, *Billy Budd, Sailor and Other Stories* (Baltimore: Penguin Books Inc., 1967).

「しかし過去は過ぎ去ったのです。なぜそれについてくださる言おうのですか。見てご覧なさい。かなたの明るい太陽はその全てを既に忘れていきますよ。それに青い海も、青い空も。それらは新しい道を歩き出していますよ。」「それは、海も空も記憶がないからですよ。」彼は意気消沈して言った。「それは人間ではないからですよ。」(306)

ここでも、親切ではあるが、自分の思考の枠を出ることがないために、実際に船の上で起こった奴隷の反乱に気付かなかったアメリカ人船長と、残虐な体験を忘れることのできないスペイン船長とのやり取りが、自然に向けるまなざしを介して語られているのである。明るい太陽、青い海、つまり善意を抱いた宇宙は見えても、その底にあるかもしれない悪意を抱いた暗い残酷な存在はアメリカ人船長には見えてこない。このようなデラノ船長とケニヨンとの共通性に気付く時、ケニヨンの視線の特質は、彼個人のものというよりは、むしろ同時代のアメリカ人に共通した特性として浮かび上がってくるのではないと思われる。

それでは、ケニヨンがドナテロに向ける視線はどうか、次の引用を見てみたい。

ドナテロの顔からすぐにその輝きは消えてしまった。一生かけて無私の努力をするなどという考えは、彼には高尚過ぎて、一瞬分かったように思えても、それを過ぎれば受け入れることなどできないものなのだ。イタリア人というのは、実際、慈善といえ、歩くたびに善意に訴えかける乞食に施しものをやることぐらいにしか考えていない。また、神の機嫌をとる方法といえ、苦行、巡礼、神社への奉納よりもっとふさわしい仕方があるなどとは思えない。(268)

この引用が如実に示すように、ケニヨンはドナテロの改悛の様子を、結局は

アメリカ人とは違うイタリア人固有の考え方、イタリア人独特の宗教心、宗教的慣行に還元してしまう。問題は、ケニヨンがそのようにイタリア人的特質を同定し差異化するだけではなくて、ドナテロの寝室におかれた数々のカトリック特有のエンブレム同様、醜悪なもの、おぞましいものとして嫌悪感すら抱き否定しようとすることである。現在のドナテロの生活を、「不健康」で「怠惰」だと見るケニヨンは、彼にそんな生活はやめて「努力」して「善行」(273)に勤め、或いは「同胞の幸せのために生きる」ように薦める。一見ポジティブな生き方を説いているようにみえるこの助言や、ケニヨンが言及している博愛精神、慈善などには、実は19世紀中葉のアメリカ社会において盛んであった福音主義的宗教実践のあり方が濃厚に影響しているものと思われる。言い方を換えるなら、彼の根底にあるのは、当時アメリカ人を大きく支配していたオプティミズム、ケニヨン自身の言い方を借りれば、「太陽のような神の満面の笑み」(“the broad, sunny smile of God”) (257)、つまり、善意を持って人間を見守る神の存在と、それに答えるうることのできる人間の可能性への信頼であるといえる。

イタリアの景色に対してもイタリア人ドナテロに対しても、これまで見たように、ケニヨンは結局は自分のアメリカ人的思考の枠組みを決して逸脱することはなかった。このようなケニヨンの姿勢を、バフチンの定義に基づいて「旅行者的姿勢」と呼ぶことができるだろうが、ここで注目すべきは、彼のその姿勢は批判されるどころか、テキストの構成そのものによって支えられているということである。今取り上げている24章から35章までは、章題を見ただけでも明らかなように、アペニン山中の塔、サンシャイン、モンテ・ベニの系図、神話、梟の塔、胸壁というように、まさしく見るべき、味わうべき、読むべき異国の風物、情景が次々と展開され、ミリアムの待つ教皇像に至る32章に至っては、まさにそのまま「旅路の情景」と名づけられている。そこでは、ケニヨンに醜悪なものとして違和感を感じさせたドナテロの改悛の姿も、道端に十字架を見つけるたびに跪いて口付けをする巡礼の姿として、既に異様さを失い、「ピクチャレスク」なもの、「見るべき美しいもの」として位置づけられ、イタ

リア的風景の中に回収されてしまうのである。つまり、作品はケニヨンに批判的視線を送るよりは、むしろ彼の旅行者的視線に寄り添うことにより、旅行記としての特質を保持し続けたと見ることができるのではあるまいか。

既に明らかなように、ドナテロとケニヨンとの間には「深い亀裂」を超えた遭遇は実現しなかったのである。当時のアメリカ人の思考の枠を出ることはないケニヨンは、いくら友の助けになろうという善意があったとしても、到底、境界を越えて他者に接近することは不可能である。なぜならドナテロは、ケニヨンには想像だにできない自分の犯した殺人の記憶と罪の意識に苛まれているからである。ケニヨンが意図せず作り上げ、あわてて壊してしまう粘土のドナテロ像、あの凄まじい形相こそは、旅行記とは違う異質な事件の原点であり、それをまずは受け止めてこそ、ケニヨンはドナテロの心の中に踏み込むことができたかもしれなかった。しかし、登場人物のうち、ケニヨンだけは最後まで事件の真相を知らされないまま帰国するのである。言い換えれば、こういう形でのみ、かろうじてこの作品は旅行者ケニヨンを批判していると言うことができるであろう。

4

ケニヨンの場合、前章で見たように、他者との真摯な出会いは結局不首尾に終わったわけだが、ヒルダの場合はどうであろうか。異国の友人たちによる殺人の現場を思いがけなくも目撃してしまい、経験したことのない苦しみに襲われたヒルダが、自らはプロテスタントであるにもかかわらず、救いをカトリックの聴聞僧に求めるエピソードは、よく議論の対象になってきた。しかし、ここでは、彼女自身のそうした苦しみよりは、その苦しみからはひとまず救われたヒルダに焦点を当てることにする。心の余裕をいったん回復したかに見えるヒルダは、次の引用に見るように、理解と救いを求めたミリアムに対して頑なに冷酷に拒むだけであった自分を後悔する。

「ミリアムは私のことをとても愛してくれた」とヒルダは良心の呵責を感じた。「それなのに彼女の一番辛い時には私を見捨ててしまった。」

確かにミリアムは彼女をとっても愛した、そしてその暖かくやさしい寛大な愛情は、ヒルダのより内気で静かな性質にも同じぐらい熱いものと呼び覚ましたのであった。それは決して消えていなかったのだ。というのも、ヒルダがあの時以来耐えてきた惨めさは、一つには彼女の感受性が依然として友に対して慕い続け悶え苦しんだということではしかなかったからである。そして今、ちょっと刺激を受けただけでその気持ちは再び目覚め、哀れな泣き声を出し、かつて自分に加えられた暴力を嘆くのであった。

自分は友人としての義務不履行の罪があったような気がしているヒルダは（今「ような気がしている (fancy)」という言い方をしたのは、ヒルダの現在の見方を躊躇なく採用できないからで、今彼女は感情によって惑わされていると考えるからだが）、その犯したような気がする過失をなんども考え、突然ミリアムが自分に託した封印された包みを思い出したのである。(386)

この引用において興味深いのは、括弧の中に挿入されたコメントである。それまで語り手はヒルダとの間に全く距離がないかのように彼女の強い後悔の念について語っておきながら、すぐさま自らが用いた“fancy”という言葉について説明を加え、彼女の気まぐれな一時的感情の高ぶりなど信用できないと言うのである。いわゆる「作家の侵入」ともいうべきこのコメントについて、ミルトン・R・スターンは、次のように面白い説明を加えている。原文のまま引用することにする。

Armored by both parentheses and dashes, the one time that Hawthorne pops in to say that Hilda might be wrong, he does so to say that she is wrong to think that she is wrong the one time that Hilda

thinks she might be wrong.⁸

スターンは、ここには作家による“the parenthetical justification of Hilda”が示されているのだと指摘しているのである。つまり、ヒルダがミリアムに対して友情を踏みにじるようなひどい行為をしたと思いこんでいるのは間違いで、いつも正しい彼女はそんなことをするはずがないのだというふうに、あくまでヒルダという人物を間違いを犯すはずのない人物として仕立て上げようとしているというのである。これは、言い換えれば、ホーソーンがミリアムに対する自分の非情さに気付いたヒルダを提示して、こんどこそはミリアムとの間に真摯な出会いがあるかもしれないと一方でちらつかせておきながら、同時に、そんな出会いは必要ですらないと仄めかしているということになる。作家のこの奇妙な姿勢、自分が作り上げている作品世界を、同時に根元から覆すような不可解さがここには見出され、読者としてはそれをどう解釈していいのか、しばし困惑せざるを得ないのである。

次いで、上に取り上げた文章に続くもう1つの例を見てほしい。

ローマの町を歩く時はいつも、ヒルダは全く何の不安もなく行ったり来たりした。出会う全ての顔が彼女の知り合いで会釈してくれるあのニュー・イングランドの村の歩きなれた道を歩いている時と全く同じであった。この人口の多い腐敗した都会でも、邪悪で不潔で醜いもの全てに関しては、彼女はあたかも自分が見えない存在であるかのように、更には見えないだけでなく、彼女自身が盲目であるかのように歩いてきたのだった。彼女はぶつかったり行く手を阻まれたりしない限りは、同じ道を行く邪悪

8 Milton R. Stern, *Contexts for Hawthorne: The Marble Faun and the Politics of Openness and Closure in American Literature* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991) 139.

なものには全く気がつかなかった。それは霊が粗雑な物質に阻まれることがないのと同じであった。この世は悪くなったと言われるが、そんなふうには無垢は自らのまわりに天国を構築し、それをなおも転倒しないように保持し続けているのである。(387) (傍点筆者)

今、ヒルダがミリアムとの約束を果たすべく向かっている行き先は、「ローマでも最も汚い不潔な場所」(387)で、「腐りかけたチーズに群がる蛆虫のごとく群れを成して暮らしている」(388)ユダヤ人ゲットーに隣接したところである。しかし悪臭を放つ地下に降りたレッドバーンとは異なり、彼女はゲットーの境界を通り過ぎてしまい、そこに足を踏み入れることはなかった。レッドバーンとのそうした違いを念頭に置いてみる時、ここに提示されているヒルダの行動パターンについての記述は少し注意をする必要がある。中でも私が傍点を施した箇所は、恐らくホーソーンが括弧に入れ忘れたのではないかと思いたくなるものだが、その狙いは先の引用とは全く逆であるといつてよい。つまり今度はヒルダを正当化しようとするものではなく、痛烈な批判である。語り手は、何事も恐れることなく外国の町を闊歩するニュー・イングランドの娘の勇敢さを称えるかにみえる、その一方で、彼女自身が実際は「盲目であること」、つまり現実世界に否定しがたく存在しているはずの醜悪さ、邪悪なるものが全く見えていないことに対する痛烈な揶揄をそっと差し挟んでいるのである。

外国、自分の育った土地とは違う所を訪れていたとしても、あたかも自分の故郷にいる感覚で認識してしまう、言い換えるなら、自分が見たいと思っているものしか見ない、見たくないものはその意識にも入ってこない、こうした姿勢は、既にケニヨンにおいて指摘したとおり、自分の考え方の枠を出ることのない「旅行者的態度」と呼んでいいものである。この引用の場面が、彼女がミリアムに対して救いの手を差し伸べようと急いでいるシーンであることを考えると、矛盾したことに、語り手はその行為を語りながら、その実現性を全く信

じていないことになるだろう。

テキストは、以上二つの引用に見たように、「ニュー・イングランド生まれ、ニュー・イングランド育ちの娘」(367, 358)「ピューリタンの娘」(362, 351)であるヒルダに対して、極めて屈折した相矛盾した態度を見せるのである。自分の正しさを疑うことのない彼女に対して共感、賞賛を示しているかと思えば、揶揄、嘲弄をほのめかす、あるいは、己を悔いる彼女に対しては、その必要がないとほのめかす、といった具合に、まったく一貫性を欠いた相矛盾した態度を取っているのである。

ここで結論的なものを言うなら、この作品においては、ミリアムとドナテロはホーソーン的ロマンスの世界に誘うはずの「他者」であったとってよいだろう。その世界は決して心地よいものではなく、むしろ、普段はわれわれが意識の外においているものの、否定しがたく人間を捉え悩ます、悪の存在、セクシュアリティの誘惑、更には神意或いは真実に対する疑惑、などなど、を突きつけてくるものであった。その意味で「他者との出会い」は、自己にとって非常に苦しい意識の覚醒、辛い葛藤を迫るものである。テキストは二人のアメリカ人にとって何度も「他者との出会い」をきわめて重要なモメントとして提示したのであったが、これまで見たように、その結果は、どちらかと言えば曖昧なものに終始したり、その対応そのものが常にずらされ、彼らは他者に真摯に対峙しないまま、故郷アメリカに帰国し、物語は終わってしまうのである。ミルトン・R・スターンの痛烈な言い方を用いるなら、「関わりたくない観光客的ピラトたちは、あの幸運の国アメリカの汚れない緑の丘へ向かっていくのだ」ということになるだろう。

これまで旅行記としてこの作品を見てきた立場からすれば、旅行記のジャンルを逸脱しようとしたロマンスが、最終的には旅行記によって抑圧されてしまった例をここに見ることが出来るように思われる。しかし、それは単に作家が二つの文学ジャンルを同時に狙って失敗したというだけではすまされない気がする。ホーソーン自身の中に祖国に対する複雑な思いがあり、その葛藤がこう

いう形で姿を現したのではないかと思われるのである。アメリカ人作家として故国に対してことさらに敬意を示しながら、一方で、ケニヨンやヒルダにまさしく示されているように、自らの正しさを決して疑うことのない祖国は、果たしてロマンスに対してどのような理解を示すか、人間性の闇の部分に理解を示すのか、他者に対して真摯な理解を示しうるのかなど、この作品を書いた時のホーソーンには、祖国に対する不信も根強く存在し、その二つの間を絶えずゆれうごいていたのではないかと思われる。そこに二人のアメリカ人を描きながら、彼らに思い切って「敷居」を跨がせるに至らなかった理由の一端があるのではないかと思われるのである。

5

本論を終わるに当たってどうしても触れておきたいホーソーンのエッセイがある。それは「主として戦争について」⁹ (1862) という小品である。ホーソーンがヨーロッパ（正確にはイタリーの後イギリスにしばらく滞在して）からアメリカに帰国後、始まった南北戦争に対して新聞や電信を追うだけでは飽き足らなくなり、自分自身の目で確かめるべく南部へ出かけて行った時の体験を綴ったものである。冒頭で「国土を覆った恐怖や悲しみから自分を遮断し、戦争の真っ只中で愚にも付かない思いをめぐらしていることは、一種の裏切り行為」だと考えたことが、南部行きの発端になったとホーソーンは書いている。しかし、そうした言葉にも拘らず、私には文中から国を二分したほどの戦争の真っ只中にあるアメリカが余り感じられないのである。その原因は恐らく、この作品が、南部への視察を目論んだそもその意図にも拘らず、結果は一種の旅行記であることから余り逸脱することがなかったことにあるように思われる。繰

9 Nathaniel Hawthorne, "Chiefly About War-Matters By a Peaceable Man."
Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne 23.

り返される「キャンプ地や面白い場所への小旅行」「この遠出がわれわれに見せてくれた興味深いもの」「面白いものを求めてのさまざまな遠足」(“excursions to camps and places of interest” (415), “interesting objects, which this expedition opened to our view” (431), “various excursions...in quest of interesting matter” (438)) といった言葉が如実に示すように、ここに記されている旅は、結局は1人の北部人が何か面白い物がないかと南部へ物見遊山に出かけた記録だと言ってもそう間違いはなさそうに思われる。もちろんホーソーンは戦いに参加したわけではないので、戦闘の様子が語られることはない。むしろ、来る前に耳にしていた個別の戦いが行われた場所、その残骸、噂を聞いていた人物が現実に関わっていた場所など、まるでそれらが既に興味深い過去の出来事の名所旧跡であるかのように次々と訪ねて歩くホーソーンがいる。したがってこの作品を読む読者は、時々一瞬その時系列を疑う気さえ起こってくる。つまり、語られている今は、南北戦争が現実に行われている今なのか、それとも既に数年前に終わってしまっている今なのかと。

ここでもいくつかの出会いがあるが、『大理石の牧神』との関連で見逃せない出会いの一つ取り上げておきたい。それは、北部へ逃げていく南部黒人奴隷の一群との出会いである。ホーソーンの黒人に対する意識を考える上で示唆的な文章と思われるので、少し長くなるがここで引用したい。

彼らは北部で見慣れているあの人種の実例とは似ていなかったし、私の判断ではずっと感じが良かった。彼らの服装はとても粗野で、——まるでその服装は自然に生えてきたようであり、——物腰も絵画に見られるようにとても自然で、(北部の黒人からは全くなくなってしまっている) 原始的な質朴さを身に着けていたので、彼らは、必ずしも人間ではないが、恐らく同じほどに善良で、古代の牧神や田舎の神々に似ている一種の生き物に思えた。こういう言い方をすれば誰かの怒りを招くかもしれないが、そんなことはたいしたことではない。いずれにしても私はこの哀れな奴隷た

ちに親切な気持ちを抱いたが、かといって彼らのために何を願えばいいのか正確にはわからなかったし、またどうやって助けてやればいいのかさっぱり分からなかった。彼らに潜む人間性のために追いつ返すことはしなかっただろうが、殆ど同じくらいに、彼ら自身のために、彼らを異国の土地に急いで行かせる気にはならなかったろう。今私が思うのは、この戦争の結果によって誰が利益を受けるにしても、この黒人たちの世代ではないだろう。その人種の子供時代はいまや永久に去ってしまい、これからは極めて不平等な条件で世間と厳しい戦いをしなければならないのだ。私自身の人種を代表して、計り知れない神意が両方の当事者に善を施す積もりでいられることを喜び願うばかりだ。

少しの人にしか知られていないが、ピューリタンの子孫をこれらヴァージニアのアフリカ人と極めて奇妙な形で結びつける一つの歴史的出来事がある。メイフラワー号の直系であるという意味で、彼らはわれわれの同胞なのである。最初の航海において、その宿命の胎は、プリマス・ロックにひとかえりの巡礼たちを送り出し、それに続く航海においては、南部の陸地に奴隷たちを生み出したのである——それはぞっとする出産ではあるが、そのためにわれわれは本能的な同族意識を持ち、たとえ血を流し町を廃墟にしても彼らを救おうと抑えがたい衝動に駆られるのである。(傍点筆者) (419 - 420)

奴隷制の観点からホーソーンを厳しく批判したイエリンは、それにも拘らず、「この意味深いメタファー」（メイフラワー号のこと）について、「ついにホーソーンは人種と奴隷制というアメリカにおける中心的問題に想像的に対応を示したのだ。」と、好意的にこの文章を捉えている¹⁰。しかし、この意見には

10 Jean Fagan Yellin, "Hawthorne and the Slavery Question," *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*, ed. Larry J. Reynolds (Oxford University Press, 2001) 157.

私は同意できない。というのは、南部黒人奴隷との初めての出会いにおいて、ホーソンが境界を越えた他者との遭遇を経験したかどうか、この点について私は極めて懐疑的にならざるをえないからである。

そのような判断をした理由は、ここで用いられた驚くべき二つの表象、正確にはその二つの間の余りの懸隔、矛盾にあると言えるかもしれない。その一つは、南部黒人奴隷がピューリタンと「同じ胎から生まれた兄弟」だというもの。ホーソンはプリマス・ロックに清教徒たちを運んだあのメイフラワー号が、次の航海では、南部に奴隷を運んだのだという史実（これが事実であったかどうかは私は確認していない）を暴露する。しかし一方で、ホーソンは出会った南部黒人奴隷に対して、もう一つの驚くべき表象「古代の牧神や田舎の神々」を与えている。南部奴隷たちにこのメタファー（語り手の言い方を借りれば、「親切的な気持ちの表現」とあるが、）を与えた時、彼らの置かれたポジションと語り手のそれとの間にはいくつものレベルで距離が開いてしまったのではないだろうか。語り手は19世紀アメリカに住む北部白人であるのに対して、奴隷達は、ローマ或いはギリシャ神話上の存在、人の胴と山羊の下半身を持つ「一種の生物」、更に、ホーソンが『大理石の牧神』を書くきっかけにもなったピクチャレスクな芸術作品など、すぐさま両者の間には隔たりが広がる。（エリック・チェイフィッツは「この審美化がホーソンがこれらの人々を非人間化することに対するいいわけになっている」と言っている¹¹。）更にはドナテロの場合でも示唆されていたように、ここでも「牧神」というのは汚れのない未成熟な子供である。「この人種の子供時代はいまや永久に過ぎた」という言葉には、ホーソンは恐らく意識していないにも拘らず、当時の荘園主が自己弁護のために常套的に用いた表現——主人は親として黒人奴隷を子供のように庇護しているのだとする南部イデオロギーのコンヴェンション——を見

11 Eric Cheyfitz, "The Irresistibility of Great Literature: Reconstructing Hawthorne's Politics," *American Literary History* Fall 1994: 556.

て取ることも可能である。これらの表象化は、ホーソーン自身の意図を裏切って、見られる対象である南部黒人奴隷たち自身を幾層にも亘って引き裂く結果となっているのではないだろうか。

更に注目すべきことは、このような両者の間の距離を生み出しているのは、語り手が旅行者として取っているポジションである。ここでいう「異国の土地」(“the stranger’s land”)とは、黒人奴隷たちが今向かおうとしている北部の町のことであり、その“the stranger”とは、今南部を訪れているホーソーン自身のことであるのは言うまでもない。こうした旅行記のコンヴェンションを用いるとき、対象は、同じアメリカにいるにも拘らず、見知らぬ国の異邦人としてさらに遠くに退くことになるであろう。また、バフチンの指摘にもあったように、ホーソーンが南部黒人を見るときの基礎にあるのは、北部の町で彼が既に出会っている黒人(それはもはや奴隷ではなかった)であることを考える時、彼の描く南部黒人奴隷像が果たしてどこまで実像に肉薄したものであったか甚だ怪しくなる。「同じ胎から生まれた兄弟」という同一性を示唆する表象と、「古代の牧神」という異質性を示唆する表象、その両者の間の余りの矛盾というか隔たりこそは、ホーソーンが境界を越えて他者に肉薄することにはならなかった証左に思えるのである。

『大理石の牧神』におけるホーソーンは、ドナテロに対するケニヨンの視線を美しい景色に向ける外国人旅行者の眼差しと本質的には違わないとして、多少とも批判的にみていたはずであるが、この南部訪問記においては、彼自身が投げってしまった旅行者のまなざしにホーソーンは気付いていたのであろうか。

* 本稿は日本ナサニエル・ホーソーン協会第23回全国大会シンポジウム「ホーソーン文学と他者性」(2004年5月22日、於英知大学)において、司会・講師として発表したものに加筆したものである。